

『金色夜叉』

——成立の周辺と文章表現——

小 沢 聰

『金色夜叉』は明治三十年一月一日から、読売新聞紙上に断続六年に渡って連載された。すなわち『金色夜叉』前篇（明治三十年一月一日）と二月二十三日）『後篇金色夜叉』（明治三十年九月五日）と十一月六日）『続金色夜叉』（明治三十一年一月十四日）と四月十一日）『続々金色夜叉』（明治三十二年一月一日）と四月八日）『続々金色夜叉』続篇（明治三十三年十二月四日）と三十四年四月八日）『続々金色夜叉』続々篇（明治三十五年四月一日）と五月十一日）である。

このうち、読売新聞発表の最後の三章分を『新小説』が、明治三十六年一月、二月、三月号に『新続金色夜叉』という題で載せている。さらに単行本としても『近来絶無之奇書』というふれ込みで春陽堂から次のように刊行された。

。前編 明治三十一年七月六日発行

。中編 明治三十二年一月一日発行

。後編 明治三十三年一月一日発行

。続編 明治三十五年四月二十八日発行

。続々編Ⅱ明治三十六年六月十二日発行

この『金色夜叉』は、新聞連載と同時に広い層に愛読され、いち早く大衆に愛される小説として大反響を呼んだ。新聞とラジオ、それに時代の相違はあるが、さしづめ昭和二十年代のラジオドラマ『君の名は』に似た現象であったろうと思われる。

さて『金色夜叉』という題名については、金色夜叉、つまり黄金色をした極悪な鬼神Ⅱ黄金魔、すなわち金だけに目のくらんだ人間、高利貸の意味として紅葉が用いたというのが通説である。(塩田良平『明治文学論考』昭和四十五年等)したがってこれは間貫一の象徴として名付けられたことになるのだが、私は、金色夜叉とは金・夜・叉と色・夜・叉の二夜叉を併せた意もあり、それはまた、間貫一と鴨沢宮の二人を合せた象徴であると考えたい。

このことは、貫一から見れば、深い愛情で結ばれていたかに見えた宮が、突然、まるで手の裏を返したように富山唯継になびいてしまったという現実が、全く信じられなかったことで、有名な熱海の海岸での、貫一にとっては、死ぬか生きるかの命がけの説得の努力も、全然宮に通じなかったことを思えば、宮はもはや貫一にとっては人間の血を全く失った冷血な夜叉以外の何物でもなかった訳で、間貫一Ⅱ紅葉(後で考述)は、思わず心の中で宮のことを、金色夜叉め」と罵倒したことであろう。(私の相像の内であるが、金色Ⅱ乞食こじきの意をも含んでいるように思えてならないが、これは後の考証に委ねる)

紅葉にとって金色夜叉とは、まず宮をさした言葉であったであろうことは、貫一Ⅱ紅葉の気持ちになって考えてみれば、おのずと答えが出てくるように思える。そこでまず、

金色夜叉Ⅱ鳴沢宮の象徴ということになる。

しかし、目の前で愛を裏切られ、表面的表情は別にして、それをあざ笑うかのような宮の金・色・夜・叉・ぶ・りを見て、そのまま黙って引きさがっていられる貫一Ⅱ紅葉ではなかった。相手が血も涙もない金色夜叉であるなら、自分も金色夜叉となり変って宮を見返してやろうと、ここで貫一も冷血な金色夜叉となる決意をする訳で『金色夜叉』を新聞に連載する以前、明治二十九年十二月二十三日の読売新聞の社告に紅葉は

「暮夜窮巷、人の血を吮ひ人の骨を咬む、陰險、譎詐、残虐、非道、世は実に高利貸を目するに大悪魔を以つてす。今や紅葉山人、其円熟勁瘦の文章に依つて渠を變転自在の脚色に反映せしめて、其の真相を描く」

とあるように、宮の金色夜叉に対抗するためには紅葉自身も大悪魔、すなわち金色夜叉となる以外にないことを決意している。そこでこんどは、

金色夜叉Ⅱ鳴沢宮であり、間貫一でもある。という図式となる。このことは、間貫一だけが金色夜叉である、という通説より、全編の文章の流れから考えても紅葉の気持ちになって考えても妥当で無理がないといえる。

特に貫一が金・夜・叉であるということは説明を要しないが、宮が色・夜・叉であるという意味合いもあり、紅葉はこの小説の中で多岐に渡って、その色夜叉ぶりを暴き続けている。

例えば春陽堂の単行本の前編の中から、そのほんの一部を拾ってみると、

人の打騒ぐを興あるやうに、涼しき目を睜りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を売るものの仮の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。(第一章九頁)

彼は自ら其の色好きを知らばなり。……富人の醜き妻を厭ひて、美しき妾に親むを見たり。才だにあらば男立身は思のままなる如く、女は色をもて富貴を得べしと信じたり。(第三章四二頁)

襖の僅に啓きたる隙より差覗けば、宮は火燧に倚りて硝子障子を眺めては俯目になり、又胸痛きやうに仰ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美しき目を睜るは何をか思凝すなるべし、人の窺ふと知らねば、彼は口もて訴ふるばかりに心の苦悶を其状に顕して憚らざるなり。(第五章六〇頁)

幾許大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻が操を破る傍に付いて見て居るものかい！貫一と云ふ歴とした夫を持ちながら、其夫を出抜いて、餘所の男と湯治に来てゐたら、姦通して居ないといふ証拠が何処に在る。(第八章一三九頁)

己の身に換へてお前を思つてゐるほどの愛情を持つて居る貫一を棄てて、夫婦間の幸福には何の益もない、寧ろ害になり易い、その財産を目的に結婚を為るのは宮さん、如何いふ心得なのだ。(第八章一五一頁―二頁)

宮、おのれ姦婦、やい！貴様のな、心変をしたばかりに間貫一の男一匹はな、失望の極発狂して、大事の一

生を誤って了ふのだ。学問も何ももう廃だ。比恨の為に貫一は生きながら悪魔になって、貴様のやうな畜生の肉を啖って遺る覚悟だ。”（第八章一五九頁）

いつの世も若い女の大きな武器の一つは色であり、今も昔も変わらず、特に上等な色があれば思いもよらない優雅な生活もできる可能性を持っている。紅葉は小説の中で、宮をその典型としてとらえ、立場は違うが貫一の金色夜叉と宮の金色夜叉との葛藤の連続ともいえるストーリーでどんどん書き進み、特に後半は宮の心情をめんめんと書き続けて、作品の中では読者の関心を集めるように仕組まれた大きな事件などの設定はほとんどないにもかかわらず、多くの読者を強く引きつけて離さなかったものである。

宮が色夜叉でもあることを認める説もある。

“夜叉の数は多し、過去九万八千夜叉、現在九万八千夜叉、未来九万八千夜叉あり、間貫一は失恋のあまり、いや失望のあまり、（略）金夜叉となりて（略）お宮は即ち色夜叉なり。”（『芸文』昭和三十五年八月「金色夜叉合評」）

ところで、紅葉がこの作品に『金色夜叉』という題名を思いついたのは明治二十九年十二月以前のごく近い時期であったと思われる。（読売連載は明治三十年一月一日から）というのは『金色夜叉』の最初の腹案覚書きとも考えられる『如是畜生』（紅葉遺文・明治四十三年一月所収）の原稿が「茶から集」と題する紅葉自身の袋綴半紙本に書き留められており、その記載日時は明治二十八年以降三十三年四月までの間であることが考証されており（勝本精一郎『尾崎紅葉全集六巻』の「金色夜叉腹案覚書解題」）更に弟子の江見水蔭に紅葉が話した金色夜叉のヒントとなる話がある。それ

は、明治二十九年七月に紅葉が片瀬に江見水蔭を訪ねた折（小波、思案、柳浪、鏡花、春葉、風葉と共に）に語られたもので（江見水蔭『実説金色夜叉』昭和九年）その時の会話の中では『金色夜叉』としての直接の話は出てこないが、すでに、おぼろげながら構想を持っていたことは語られている。しかし題名に関しては、少なくとも表面的には全く触れていないところからすると、題名決定はこの時より後、明治二十九年七月以降と推定される。

紅葉が水蔭を訪ねたその日、紅葉が当時愛読していたというアメリカの女流作家（実際はイギリス人だったが、ほとんどの著書をアメリカ・ニューヨークの出版社から出していたため、紅葉が思い違いをしていたものと思う）^④小沢の著した『ホワイトリリー』（実際は別名の小説）という小説の話になった。その内容は、貴族の青年と農家の娘とが思想愛の仲になり、周囲の反対を押し切って結婚するが、教養の違いが災して結婚生活は破綻をきたし、二人の間に生まれた二人の姉妹は農村に帰った母親に引きとられる。しかし、やがて二人共父親の方に引きとられ社交界に出入りするようになるが、姉の方が悩みをいだいたまま水死するというもので、江見水蔭の『自己中心明治文壇史』（昭和二年）によると、紅葉はそこからヒントを得て、“近々読売に小説を書く”と話を結んだという。それが『金色夜叉』であった。

題名はともかく、すでに紅葉の頭の中には、この時かなりはっきりとした構想があったことがわかる。あるいはすでに、題名もこの頃、紅葉の頭の中には入っていたのではないかと思われる。書く立場から見れば、構想の段階ではすでに題名もかなりはっきりしたものがあつた場合が多いからである。

さて『世界之日本』（明治三十年一月）の「道德途説」欄によると、紅葉の『金色夜叉』は“年頭より読売新聞紙上に表るべし”と広告されている。この記事は、同誌の一月号用の記事であるから、編集されたのは当然それより一、二ヶ月前で、どんなに遅くとも三ヶ月前位には題名も決定したものと認めることができる。

以上のようにはっきりと題名が表面に出てくるといふ形で決まったのは執筆近くではあるが、その題名も含めて、構成は紅葉の胸の内に相当前から（おそらく須磨子が大橋新太郎になびいてしまった時あたりに心に期していたものと思ふ）しっかりとしたものがあったものと思われる。

ところで紅葉のいうイギリスの女流作家の著した『ホワイトリリー』（紅葉がそういう題名と思い込んでいた作品）が『金色夜叉』の材料の一部になっていることはまず間違いないところであるが、このイギリスの女流作家とは森毅『東京文明開化遺跡漫歩』によると、カトリック女流作家のバーサー・エム・クレイ＝Bertha・M・Clay（1836～84）のことで、紅葉はこの作家の作品を多く読み『不言不語』のタネ本としたり、また『金色夜叉』もこれによったものであると言われている。

しかしクレイには『ホワイトリリー』という題名の作品はないから、紅葉のいう『ホワイトリリー』というのは、ホワイトリリー（白百合）という言葉がよく出てくる、『Dora Thorne』（内容は前述）ではないかと思われる。

この作品は未松謙澄が『谷間の姫百合』の訳名で翻訳されているし、菊池幽芳は同じこの作品をもとにして『乳姉妹』（明治三十五年）を著している。しかしこの作品よりむしろ同じ作家の『When the Bell is Ringing』の方がストーリーが『金色夜叉』に酷似している。

この作品では女に捨てられて怒った男が、その女を見返すためにも、一念発起して、困っている人々を助けたいという悲願を後に医者になるといふことで達するという内容で、『金色夜叉』の主人公の貫一が高利貸になるのとは逆のよきな立場をとってはいるが、ストーリーとしては実によく似ている。

『When the Bell is Ringing』では、男を捨てた女が結局は不幸になり、瀕死の病になって、最後は自分が捨てた男の病院に引きとられることになり、その時に全ての哀愁を込めたかのように鐘が鳴っていた。というものである。

『金色夜叉』も腹案の段階（『如是畜生』より後の腹案）では、宮は悔悟と現実生活の疲れからついに発狂して、それを哀れに思った貫一が最終的には宮を引きとるということになっていたところから考えても、ストーリーとしては実によく似ているといえる。この事に関しては福田清人氏は『尾崎紅葉集』（昭和四十六年）の解説で、島田謹一氏は立教大学卒業論文指導書『バーサークレイと明治文学』でそれぞれ指摘されている。

以上のような経過からみると『金色夜叉』のタネ本としては『When the Bell is Ringing』がまず第一にあげられるが、私はあくまで、最初の段階、すなわち『如是畜生』にそって書いていた頃には、紅葉の頭の中にはまだ、『When the Bell is Ringing』はなかったもので『Dora Thorne』のみをタネ本としていたものと考ええる。そうでなければ、水蔭を訪ねた時に当然『When the Bell is Ringing』の話も出ていたはずで、それが出ていないのはきわめて不自然である。『金色夜叉』にしても、もし『When the Bell is Ringing』を最初からタネ本としていたら紅葉も、物語が前篇と後篇だけではおさまらないであろうことは当然わかっていたはずである。

これは、読者の反応の大きさに驚き、もっと長く書く必要にせまられて、あらためて、同じ作家、バーサー・エム・クレイの『When the Bell is Ringing』などを読んでそこから次のヒントを得て、後篇以後を書き続けたものと考ええる方が自然である。したがって『如是畜生』以外の腹案は『When the Bell is Ringing』などを読んで後のものと考ええる。いずれにしても紅葉が、バーサー・エム・クレイの複数の作品の中からヒントを得て書き進んでいったというのが正しいであろう。さらに同じイギリスの女流作家マリア・エッジワース（1767～1849）などの影響もあったかも知れぬ。

さて、バーサー・エム・クレイからヒントを得たものを、紅葉の体験をふまえて、どのようにしてストーリーを発展させていったかということであるが、これにはまず、主人公のモデル考という問題がからんでくる。この件に関しては、貫一のモデルが児童文学の祖と言われている巖谷小波であるという説が伝説のように残っているが、この問題で詳しい

考証を試みているのは『実説金色夜叉』（水蔭講演全集第二冊、昭和九年）で、これは、それより前に出た小波の『金色夜叉の真相』（昭和二年）を補遺したものであるが、更にこの『金色夜叉の真相』のもとがあり、それが同じ小波の『我が五十年』（大正九年）で、『金色夜叉』については、この書の中の「噂のモデル問題、金色夜叉のモデル」の項に記されている。

“そのうちに結婚問題が持上った。私もいい頃と考えたから兼ねて熟知の間柄ではあり、彼の『初紅葉』以来、時々モデルにもした例の令嬢を迎ふべく、其家人に交渉を試みた。然るに私の要求は拒絶されて此恋は全く失敗に帰した。（中略）此時紅葉君の解釈によると、此の縁談の謝絶の理由は、僕の家の方の財政の傾いて居ると、僕の職の不生産的なのが、まず以って先方の気に入らぬと思ったからだ。実際其頃は小説家と云えば（或は今でも）まづ貧乏商売、道楽渡世として堅気の家からは好かれなかつたものだ。そしてそれが又同じ職にある君としては、甚だ癢に触つたのも決して無理ならぬ事である。

で、果して君が僕をモデルにしたとすれば、まず其時に発芽を認むべきだが、丁度又その頃に、他の方面にもやゝ似た問題があつた。それは他でもない。僕がやはり二十前後の頃、ある所に居た多勢の少女の中に大分浮名を立てられたのがあつた。処がそれが僕の留守の間に、即ち京都に赴任して居る間に、他の某々と又浮名を立てられ、その中の乙某に其の身を任すことになつたのである。

此関係も彼紅葉君は委しく知つて居たのである。そしてその少女に対しては、ある時僕に代つて、大いに恨みを云つた揚句、酔つたまぎれに足蹴にまでしたさうだ”

これが小波の思い出話であるが、最初の令嬢は漢学者川田夔江の次女綾子で、後の少女とは芝紅葉館の女中・中村須磨子である。この須磨子は前述のごとく、元来は紅葉が愛していた女性で、とても紅葉の自慢の種で、小波の前にもちよこい連れてきて見せびらかしていたが、どちらかという短気でしつこい紅葉より、天心爛漫でおっとりしていた小波の方にだんだん気が移ってしまったという（塩田良平『明治文学論考』昭和四十五年）。紅葉はその時は小波のために身を引いたのだが、須磨子が自分から離れてしまったことに対して、面白くないものが残っていたのは当然である。しかし相手が親友で、しかも文学同人の小波であったことでもあり、自分から小波に須磨子を紹介してしまつたこともあり、そして何より、かんじんな須磨子の気持ちですでに紅葉から去ってしまったため、諦めざるを得なくなつてしまった。（この時代は今より友情を大切にしていたという一面もある）

紅葉にとっては、小波のために断腸の思いで身を引いた須磨子が、その小波からも離れて、こともあろうにその頃、紅葉館に出入りしていた、当時、日の出の勢いの大出版社博文館の若社長、大橋新太郎と簡単に結婚してしまつたことは許しがたい屈辱であつた。

一方女中であつた須磨子にしてみれば、最高に豪華であざやかなゴールインということで、紅葉にはまさに金夜叉と色夜叉の結合としか思えなかつたことであろう。

博文館と言えば、当時は飛ぶ鳥も落す勢いのある大出版社で、紅葉も小波もこの出版社にはひとかたならぬ世話になつていた。特に小波は、有名な童話『こがね丸』をはじめ、児童文学の発表の場のほとんどを博文館に頼っていただけに、それこそ切つても切れない関係にあつた。そんな訳で二人にとって、文筆活動を続けてゆく以上は手も足も出ない相手で、血気盛んな紅葉が、"またもや金が勝利を占めてしまつた"と憤慨して、その怒りを須磨子を足蹴にすることで爆発させたとしても不思議ではない。紅葉はこの後も「自ら進んで博文館のものには執筆しなかつた」と江見水蔭が

回想しているほどである。

こう見てくると紅葉は、小波の貫一より、はるかにはっきりした形で須磨子を宮のモデルとして登場させていることがわかる。しかもかなり強い調子で憎しみを込めてである。これにくらべると小波が貫一のモデルであるという指摘はかなり弱い感じである。もちろん小波もモデルの一部にはなっているであろうが、それは紅葉が自分モデルであるということとをストレートに表に出すことをさけたためで、小波はいわばうまく利用されたと言うことであろう。やはり貫一は紅葉自身であるという方が妥当で無理がない。

例えば宮を恨み続ける心情などの描写は、とうてい自分の心情抜きにしては書けるものではないからである。登場人物の微妙な心情描写をする場合には、あくまでも自分の心情に置き変えて表現するしか方法がない。言葉を変えて言えば心情描写をする場合にはモデルは自分以外にはまずなり得ないということである。

以上のように紅葉は表向きは小波をモデルにしているような形をとりながら、いや最初のスタート時点では確かに小波をモデルにしたであろうが、書き進んで行くうちに、いつの間にか、貫一＝紅葉自身と変ってってしまったもので、それは小説に熱が入ってくれば当然の結果である。特に少年時代の紅葉自身の姿が貫一と二重写しになっているのではないかと思われるところが多い。それは江見水蔭の回想文「紅葉の身の上話」からもわかるが、紅葉が少年時代に金銭的な苦しみをいやというほど味わってきたことはみな知る所である。

そんな訳で紅葉は『金色夜叉』の貫一を書き進めながら、孤児同然だった自分が、金ゆえに苦悩した当時の思いをも噛みしめていたことは当然であろう。さらに江見水蔭によれば、紅葉は口癖のように「金がなくちゃ仕様がないう」と言っていたというし、明治二十八、九年頃の紅葉と同期の予備門の友人達も、学界、官界、財界等に相当進出しており、紅葉は文名こそあがっていたが収入や社会的地位は決って恵まれていなかったことから、そういう言葉が実感とな

って口から出る理由であつたと思われる。

色を武器にした女が金を武器にした男のもとに走ってしまい、しかも金のない男が対抗しようとしても手も足も出ない。『金がなくちゃ仕様がなないよ。』とつくづく紅葉が言った気持ちは彼の生い立ちなどから考えても充分頷ける。

しかし一方では、好きな女でさえ簡単にさらってしまう力を持った金に対して大きな魅力を持ちつつもまた一方では、そんな金のところへ後もふり向かずに行ってしまふ女心を心から軽蔑しようとする江戸っ子の意地もあり、結局『金色夜叉』の思想には、黄金崇拜とそれに対する反抗精神とが表裏となっている。

紅葉が黄金崇拜の最適任者として高利貸を選んだのもごく自然の発想といえるが、さらに当時、硯友社の仲間で、川上眉山や池田研池など、紅葉の囲りには高利貸に悩まされた者が相当いたことも、紅葉をしてごく自然に高利貸を主要人物（貫一以外にも）に取上げようという気持ちになつたものと思われる。

こうして完全に腹案の決まつた紅葉は、これを明治二十九年の夏に覚え書き、走り書き風にした。それが『如是畜生』である。

それは次のようなものであつた。

。恋ゆえの高利貸（『Dora Thorne』がタネ本）黄金不足のために失恋し、世の中は黄金以外ならずと妄断し、我寧ろ魔道に落ちむと強欲一点の非道を行ふこと十年、二万余円の富を累ねて一朝忽ち大悟し、金の為に死に逼る情死を救ひ、発心して情死救済の広告をして、五十余人の命を助け、一文無しになる。

『金色夜叉』の最初の腹案としてはこれに止めをさすが、その後、この腹案以外にも紅葉腹案の追加分としての遺稿

断片も発見された。それらが「金色夜叉復案覚書」で『尾崎紅葉全集』（第六卷・中央公論社）に発表されている。それを私なりに整理してみた。

(一) 如是畜生（前記）

『Dora Thorne』がタネ本

『When the Bell is Ringing』がタネ本

(二) 写真の御前（滑稽的）

(三) 恋人ありて思はぬ方に縁付ける娘の床入前の感懐。

(四) 金色夜叉（下の巻）

川澄子爵の家扶畔柳某、主家の金を高利貸に貸付けて、其利を私す。貫一高利貸の手代となりて、常に此家に出入す。

(五) 歌吉兩人の死を拯ひ、且某の身の代として大金を吝まざる貫一の心は、富山に宮を奪れし怨あるが為ならずんばあらざる也。

彼は先には金無きが為に辱められ、今は其金有るが故に、意を快にするを得たり。而も宮は悔悟して己を恋ふからは、志は果せりと心安んずると與に、漸く本善の性は出でんとす。

この心中者とともに歳月を起臥せる貫一は、歌次の為す所の一々献身的なるに感激す。之を其心の一転機と為す。

満枝、宮子 貫一

唯継 鳴沢 歌次||伝次郎

讓介 直道

④情死を拯ひし二人を暫く家に留めたりしも、交情密の如く、而も性質温良にして、恩を感じて善く尽すより、其和楽を仮りてホームとなすに、自ら心の寛なるを覚ゆるにぞ、長く留めて家政を執らしむる事。(熱海の浜にて更に断縁を續くべしとて、其処に相会する事)

○情死者の遊ぶは盆前の温泉宿也。その意気地の物語を聞きし夜貫一は快を覚えて、年末の莞結(?) 一時に霽れたる想する事。

⑤満枝の変らず恋着して、頻に訪寄るを如何にせんかと案じ煩ひけるに、情死者の内に留れるを機として、歌次を情婦に擬して、終に満枝を斥くる事。

⑦宮は憂悶して終に狂す。別家に幽せられて、本家には妾を納れ、全く唯継の為に棄てられる。是に於て貫一は心解きて、我家に引取る事。如此き熱誠の湧くに及びては、彼は到底猛烈なる業を敢る忍びずして、之を失ひし為に得たる業なれば、之を得たる為には之を失はしむべしとて、金貸業を罷むる事。

▲富山の家庭

唯継。義太夫稽古の事。□□□□く事。

▲貫一、私に讓介の為に債主を探りて、借金を返し置く。讓介知らずして、債主に聞きて驚く事。

▲讓介、官省の翻訳ヲ引き受ケテ糊口トス。

▲旧曆の七夕、宮と貫一と逢ふ事。

以上のごとくであるが、これを書いたのは大体明治二十九年から三十年にかけてのものであるとされているが、私はもう少し後と考える。

『Dora Thorne』をヒントにした『如是畜生』があくまでも原構想のプランであって、紅葉はこれに従って小説を書きはじめ、最初は前篇、後篇の二篇ぐらいで完結しようとしていたもので(後でも考述)、その他その後発見された『When the Bell is Ringing』をヒントにした腹案は、新聞の反響の大きさに驚いて、後から書き足したものと私は考える。(前考述)最初の腹案は、あくまでも『如是畜生』であって、これに止めをさす。

最後に宮が発狂したところで、ようやく貫一は宮を許す気持ちになり、その宮を車に乗せて帰る途中、赤檉満枝が旦那の骨を抱いて焼場より帰るところと相会う。このあたりは明らかに『When the Bell is Ringing』をタネ本としたものであり、第二段階あたりのプランに入っていたものと考えられる。しかし実際の『金色夜叉』に於ては、ここに至らずに中断され、またストーリーも右の腹案以外にも相当複雑になってしまっている。

さらに、執筆を始めてからも、紅葉自身が『金色夜叉』を書く動機などを話したものが雑誌『芸文』に載っているが、これは明治三十五年七月に話されているので、ちょうど単行本では『金色夜叉続編』(明治三十五年四月)が発行されて間もなくである。(紅葉はその翌年に死んでいる)その内容は次のようなものである。

凡そ人生には二つの大なる POWER があって、社会の結合を保っている。それは何だといふと、即ち愛と黄金だ。

ところが僕の考えでは、黄金の勢力は単に MOMENTARY であって、縦令如何にその力が強烈でも、とても永久にその勢力を保存して行く訳にはいかぬ。ところがそれに反対で、愛は永久不変に人生を支配して居ると思ふ。即ち人生を極めて密着に結合させて行くのが愛である。そこを書いて見たいと思って、その篇を草したのである。即ち間貫一の一身は愛と黄金との争を具象的にあらはしたものだ。それから金色夜叉を書くに就ては、今一つの動機がある。それは何だといふと、僕は明治の婦人を書いてみたいと思ったのだ。宮は即ちこの明治式の婦人の権化である。であるから主人公は貫一であるが、どうしても宮を写す場合になると貫一よりもいくらか具象的になり易い（前述のごとく貫一＝紅葉自身である故に、貫一の描写は具象的にならずに書ける㊦小沢）そこで、宮はかくまで明治式の婦人であるが、これが普通の明治式の婦人なら、富人富山その人の如きに嫁したならば、それなりに昔の関係を棄てて、富山の夫人になって仕舞って、貫一を見捨てて仕舞うのであるが、僕は宮をして超明治式の婦人ならしむるつもりで、あのやうに悔悟の念さかんならしめたのだ。これが僕の此篇を書いた動機だ。文章の方は大に L. ABOURED STYLE で前に抱一庵主人も、此文章に術気があるといふ評をしたが、実にその通りだ。実はこの小説を書き始めた時（明治二十九年）は例の言文一致が非常に勢力のあった頃で、猫も杓子も言文一致と騒いだ時だから、僕は言文一致以外にも一種の文体で能く人心の機微を写すことが出来るだらうといふ野心で、実はこんな文体を創めて見たのだ。併し労多くして功少しで、骨の折れる割には面白くない。（『芸文』明治三十五年八月号）

さて、紅葉は腹案を胸に『金色夜叉』の執筆を始めた訳だが、実際に書き進んでいくうちに前述のごとく最初の復案とはかなり離れた作品になってしまった。

その理由は色々あるが、腹案はあくまで腹案であって、実際に書き進んでいくうちに自然発生的に次々と書きたいこ

とが頭に浮かんで来て、あれもこれもと書いているうちに思わずふり返って見たら大長編となってしまうたものである。さらに『金色夜叉』は、新聞の連載小説であったために、一つのテーマをすっかり見つめて書くということができなく、毎日毎日の一つ一つを小話的にまとめるという作業もしなくてはならず、その上、毎日、ある程度のヤマ場もつくらなくてはならないということもあり、そのために次から次へと新しいストーリーが生まれていった結果、(読者の期待に応えていたためにも)とりとめもないほど続いてしまったのではないかと考えられる。

もともと紅葉は『Dora Thorne』をヒントに書き出したこの小説を、前篇と後篇の二篇で完結したいという考えであったと思われる。そのことに関しては、例えば、単行本における『金色夜叉』は、前、中、後、続、続々、新続編等にわかれているが、この単行本の中編に当たるところは、実は読売新聞連載ではすでに後篇になっているところからしても、紅葉としては、新聞では当然物語も後篇のつもりで書いていたのは確実である。ということは単行本でいえば中編の量ぐらいで完結しようと考えていたことになる。このことは原構想のプランであった『Dora Thorne』をタネ本とした『如是畜生』が前篇は主人公貫一が、恋ゆえの高利貸”となるまでを書き、後篇では、その貫一が、一朝忽ち大悟”するに至る過程を書こうというのが、そもそもの紅葉のもくろみであったと考えられることから考察できる。しかし前述のような理由と読者の反響が紅葉の予想をはるかに越えた、あまりにも大きなものであり、幅広い読者層から熱狂的に迎えられたことから、『When the Bell is Ringing』などをタネ本とした腹案も複雑になり、一方紅葉自身、少しでも長い間読者を楽しませてやろうという思いも当然のこととしてあったと思われ、特に読者の関心の的であった宮の苦悩のようすなどを中心に、それよそれよと多岐に渡って書き続けていくうちに、自分自身でさえストーリーを見失ってしまうほどになり、とうとう收拾がつかなくなってしまったものであろう。言葉を変えていえば、新聞の連載小説である『金色夜叉』は読者大衆の声を無視してまで完結を急ぐことはできなかったのである。

紅葉の死後、門弟の小栗風葉が紅葉腹案を基礎として『金色夜叉終編』（明治四十二年四月）を出版したが、この風葉が基礎とした腹案は紅葉がノートに記した「茶から集」に記載された腹案の一部に過ぎず、之は同じ門下の山里水葉が写したものであることが既に『金色夜叉終編』を書いた後で風葉にはわかっていたが、そのまま世間に対しては黙殺してしまったという事実があるが（もちろん風葉が之を書く時点ではそれが水葉の写しであったとは気がつかなかったものと思われる）しかしそれは根拠のないものではなく、水葉が紅葉自身の腹案を少し写し違えた程度のものであったと言われているが、それは次のようなものであった。

(十四)

富山の家庭

。宮の憂悶精神錯乱の緒を発して夫に離縁を申し込む。
。唯継の冷談

(十五)

間の家庭

狭山夫婦の同居
カシズキ
。両人の惻誠なる主事

(十六)

荒尾と直道とに向ひて改悛の告白。

(十七)

鴨沢一家の非歎（宮の発狂）——貫一に逢はんとして常に駈出さんとす。

(十八)

貫一人々に説かれて始めて宮を赦すの念を発する胸中の模様

(十九)

宮を車に載せ帰る途に満枝の赤檜の骨を抱きて焼場より帰ると逢ふ。

○富山は愛子に傷けられてより赤襟を擁して浪蕩す、二週間も家に帰らざる墮行新聞に出づ。

▲母親来りて病中の宮を責むる事（彼の今日の出世を言立て、其恩を感ぜざるは人非人なりと口ぎたなく罵る）

○富山一日ふらりと帰来る、留守中の事を言ふ。彼曰く家に在るの不快なる故かゝる事も為る也、善く我に事へなば今後改悛せん。汝の意如何にと詰られて、病の故に堪へずと答ふ。

○然らばとて入院を勧む。跡に（十七になる半玉也）妄を納れんが為也。宮は悔も及ばずして、今は貫一が満枝と歎するを疑ひて、絶望の底に沈み果てながら、又貫一の変れる姿を見て眷々の情に堪へざる者有る也。此身を如何に処すべき乎を思ひ煩ひて休まず。

○憂鬱性の為に入院させらるゝ事。

これらの腹案のもとで紅葉は執筆を続けたのであるが、しかしこの作品は早さを要求される新聞の連載という形をとったので、作文作業は時間的な面でも大変な苦勞となった。

しかも当時山田美妙らを中心に流行し始めた言文一致体でなく、紅葉が西鶴や一九などを愛読していたこともあって、紅葉独特の和漢混和体とも言うべき文章表現には異状なほどの執念を見せている。

例えば初稿の原稿も（現存しているのは続篇Ⅱ単行本の中編）本文は墨書きであるが、之に何度か訂正が加えられた。それでも判読しにくくなった場合には訂正の字句を朱書きにしている。さらにそれでも読みにくい場合は訂正の字句を

薄紙に書いて、それを本文に貼ってある。このような大変な手作業のくり返しと、一方では新聞という、当時としては最もスピード感を要求されたものとの組合せは、やはりしっくりいかなかったのは当然である。それでも断続的にはあるが、紅葉はこの大変な手作業をくり返しながらも、読売新聞に足かけ六年にも渡って連載を書き続けたわけである。まさに身を削るような思いであったであろう。執筆途中で紅葉は遂に病に倒れ、『金色夜叉』もとうとう未完に終わってしまった。

それほどまでに細心の注意を払って、推敲に推敲を重ねた『金色夜叉』ではあったが、まだまだ紅葉自身不満足の場合がほとんどであった。文章表現に特に力を入れた作家だけに、待ったなしの新聞連載ということであれば、気のすままないままに原稿を送らざるを得なかったことも度々に渡ったであろう。最初のうちこそ、新聞に毎日確実に連載されていたが、和漢混和体の文章のわずらわしさから次第にとぎれとぎれとなり、ストーリーもわかりにくくなってしまった。

しかし時間的制約のためにどうしても満足できなかった新聞連載の文章を、春陽堂から単行本にするにあたっては、紅葉はその修正に異状な努力を費やしている。(そのことは新聞連載では締切日に間に合わすために推敲に目が届ききらず、心ひかれるままに送っていた原稿であったことを自ら証明することでもあったが)

新聞の文と、その部分に相当する単行本(初版本)を対照してみればそのことが判然としている。例えばほんの一例ではあるが。

(新聞の文)

宮は傍かたはらに人無しと思へば○限知らぬ涙かきに搔くき昏くれて○熱海はまの浜うちみに打俯うつむしたる悲なげきの足らざるを此ここに続つがむとするなる

べし。

階下より仄に足音の響きければ、やうやう泣顔隠して、故と頭を支えつゝ室の中央なる卓子の周囲を歩み居たり。旋て静緒の持来りし水に漱ぎ、懐中薬など服して後、心地復りぬとて又窓に倚りて、外方を打ち眺めたりしが

「ちよいと、彼処に○それ、男の方の話をして居る所も御殿の続きでございますか。」

「何方でございます。へ、へい、那は父の詰所で、誰か客と見えますか。」

慥く言ひて直に静緒の覚り顔に頷くを、宮は見てぞ心に頷ける。

「お宅は？御近所なのですか。」

(単行本初版の文)

宮は傍に人無しと思へば、限知られぬ涙に掻き昏れて、熱海の浜に打俯したりし悲歎の足らざるを此に続かんとするべし。階下より仄に足音の響きければ、やうやう泣顔隠して、故と頭を支へつゝ室の中央なる卓子の周囲を歩み居たり。旋て静緒の持来りし水に漱ぎ、懐中薬など服して後、心地復りぬとて又窓に倚りて、外方を眺めたりしが

「ちよいと、那処に○それ、男の方の話をしてお在の所も御殿の続きなのですか。」

「何方でございます。へ、へい、那は父の詰所で、誰か客と見えますか。」

「お宅は？ご近所なのですか。」(原文のフリガナのほとんどは省略)

このように紅葉は新聞から単行本とする時に、新聞文での欲求不満であった部分を非常に多岐に渡って修正を加えている。その結果、新聞文における生硬な熟語や冗漫な表現はことごとくといってよい位に訂正されており、よりしっか

りとした文章となっていることである。

以上のごとく『金色夜叉』の本文が落ちつくまでには紅葉は、腹案及び文章表現に並々ならぬ努力を傾けていることがわかる。

次に問題点として、

まず第一に紅葉が読売新聞社へ入社したことは作品を書く上に大変幸運であったということである。

紅葉にとって、こういう有力なジャーナリズムとの結合は、作家生活の大きな転化となった。当時はまだ作家といっても今のように経済的地位を確立していなかったことから、安定した生活を保障された上での作家活動ということ、全力でそれに情熱を集中できたことが、作品の評価は別にしてこの大作の生まれた大きな理由の一つであったことはいうまでもない。

さらに加えて、創作の発表の場を自社内に持ったことは、発表の場の少なかつた当時としては大変に恵まれていた訳である。かくして発表の場が常に与えられ、生活が保証されれば、後はただ書くことのみ専念するだけでよいことになる。紅葉はそんな立場をフルに活用して、『伽羅枕』（明治二十三年）『紅白毒饅頭』（明治二十四年）『三人妻』（明治二十五年）『心の闇』（明治二十六年）『紫』（明治二十七年）『不言不語』（明治二十八年）『青葡萄』（明治二十八年）『多情多恨』（明治二十九年）そして『金色夜叉』など、彼の主要な作品のほとんどをこの新聞に発表していったのである。

そのことは、紅葉の作品がこの新聞の読者にふさわしい大衆性を帯びる結果となっていたことにもつながっている。第二に『金色夜叉』のわずか前に書いた『多情多恨』（明治22年起稿）で、言文一致に成功した紅葉がどうしてまた『金色夜叉』では言文一致体をさけたのかという点である。

新聞の連載小説ともなれば、誰にでも読みやすい文体＝言文一致体が最も適しているといえるし、まして時間との戦いということを考え合わせてみれば尚さらである。いくら文章表現に凝る紅葉であっていても『多情多恨』の成功ということもあり、当然、言文一致文を選んでしかるべきであったが、敢えて和漢混和体ともいえる文体で通したのは、紅葉自身が大変に保守的で江戸好みであったということだけでは片づけられないもう一つの理由があった。それは、旧友で二葉亭四迷とともに言文一致の祖とまでいわれた山田美妙への強い反撥と対抗意識があったことは否めない。

山田美妙といえは紅葉とともに、硯友社出発の時点（明治十八年三月）からの同人であり親友であった。紅葉は明治十八年末から暫く三崎町の下宿石野家を出て、駿河台の美妙の家に同居したこともあったほどで、お互いに固く信頼しあう仲であった。しかし時が移りゆくほどにその考え方の違いが生じ、しかも『我楽多文庫』がだんだん紅葉色が強くなって、半独善的のような感じになってしまったことへの不満、文章表現上の意見の相違などから美妙の心が次第に硯友社から離れていってしまった。このことは『赤い鳥』の童謡の世界での二大柱であった北原白秋と西條八十の關係によく似ている。独善性が強く、個性の強い文学の世界では、ライバル同志はお互いにプラスとなるにもかかわらず、排他的になり、どうしても共に前進してゆくということが不可能の場合が多いようである。

紅葉が『我楽多文庫』第七号（明治二十年九月十日）第八号（明治二十年九月二十五日）第九号（明治二十年十月十日）の三号に渡って、美妙の『夏木立』を厳しく批評したことを起爆剤にして、紅葉と美妙の対立は決定的となり、美妙は当時の有力出版社の金港堂の雑誌『都の花』の主幹に招かれて、ついに硯友社と決別した。紅葉はそんな美妙に対して烈しい絶交状を出している。

こんなことから紅葉は『金色夜叉』こそ、自分の代表作にしたいと秘かに心に期していた作品だけに、美妙に先を越されてしまった感のある言文一致体で書く気持ちにはとてもなれなかったことは想像にかたくない。しかしこのことは

紅葉にとって、特に文章作成の上では不幸なことであった。時間的制約を受ける新聞連載での和漢混和体の文章では大変な負担となってしまったからである。しかしそれがまた、名文を生む結果ともなった訳で、伊藤整は紅葉のこの文体を、当時の読者に「ある安定感を与える文章構造」とし、「地の文の文語体はストイックな擬似近代なる明治の社会秩序にふさわしい安定感を与え、会話のなまなましい口語体は、その秩序の中にあって息づいている人間性をじかに感得させる働きをした。」（『日本文学全集尾崎紅葉・幸田露伴集』「解説」昭和三十九年）と述べている。

会話は口語体で他は文語体で使いわけ、絢爛たる美文調で書くことのわずらわしさは紅葉自身が前述のごとく認めているし、後藤宙外が明治三十六年十二月号『新小説』の中の「追憶録」の中で紅葉が「どうしても今度の文章は穎才新誌（明治10年代に青少年に人気のあった漢詩文中心の投書雑誌）でいけない、之を書き終ったら是非言文一致に立ち帰って、今までの言文一致とは違う、もう少し綾のあるものを書いてみよう」と、ここでもそのわずらわしさを告白している。

第三は再び主人公とテーマについてであるが、前述の通り、私は表面的には主人公は貫一であるが、真の意味での主人公は宮と考えたい。

紅葉にとって宮＝須磨子は憎んでもあまりある女であった。彼女が大金持ちの富山唯継＝博文館の若社長大橋新太郎のもとに走ってしまったのは金の力であると知り、金に対して大変な執念を燃やすことになるが最初のプランはともかく、後半はやはり最後は「自分を裏切ったような女は必ず不幸になる」という結果に持ってゆくの大きなテーマであったと考えたい。これは紅葉の自我の強さと、宮＝金に目のくらんだ金色夜叉、に対する異常な憎しみのためやはり自身も金色夜叉となり、宮がそのまま幸福になる事を頭底許す気にはなれなかったからで、あくまでも宮を改心させ悔悟させなければ気がすまなかったのである。

紅葉はその宮について雑誌『芸文』（昭和三十五年七月号）で「明治の婦人を書いて見たいのだ」としながらも、「僕は超明治式の婦人ならしむるつもりで宮をしてあのように悔悟の念さかんならしめたのだ」と、エスカレートさせてしまったように、宮Ⅱ色夜叉（金色夜叉）に烈しい怒りをぶっつけ、自身も金色夜叉となって「暮夜窮巷、人の血を吮ひ人の骨を咬む、陰険、譎詐、残虐、非道、世は実に高利貸を目するに大悪魔を以てす。」と書き進んでいったのである。そして、人生は金などより結局は愛の力の方がはるかに貴いものであるという紅葉の願望と信念を無理やり明治の女性の宮に背負わせてしまったために、明治の女性を書くとしながらも、結果的には超明治の女性、すなわち明治時代には存在しなかったような女性を描く結果となってしまった。

『金色夜叉』で紅葉は、宮を金持ちの唯継といったん結婚させた後、宮の貫一への新しく慕る悔悟からの思慕のくだりに新聞読者の多くが心を動かされ、ほとんどの読者は宮に同情し、その運命を案じて熱狂的に読まれていたことを考慮して、いわば、お客様である読者の熱狂に応えるかのように、金の問題よりもこうした宮の苦悩を長々と書かざるを得なくなってしまうが、紅葉にしてみれば宮Ⅱ須磨子を小説の中だけでも悔悟させ続けていけたことは、せめてもの気晴しとなり、書くことも楽であったろうと思われる。そうになると、もはや主人公の比重は間貫一より実質的には鴨沢宮の方が重くなってしまった訳で、『如是畜生』では、このあたりは「恋ゆえの高利貸……」とあくまでも貫一を中心に考えていたものだったが『芸文』では「超明治式の婦人を書いてみたい……」と、その考えが移行した発言となってしまった。このことはとりもなおさずタネ本が『Dora Thorne』から『When the Bell is Ringing』へと移っていたことを示している。

第四にストーリーについてであるが、こうして読者の期待に応えるために、悶々と宮の苦悩を書き続けた結果、紅葉本人ですら、しっかりしたストーリーがわからなくなってしまい、前篇、後篇、続篇、続々篇、続々の続篇と伸ばしに

伸ばしながら、とうとう未完に終わってしまったほど長いものになってしまったもので、これは新聞連載の不幸と言わざるを得ない。

事実、紅葉としては、ここで終りたいと、思ったであろう個所が度々認められるのにもかかわらず、次々とファンである読者の要望に応じているうちに収拾がつかなくなってしまったもので、春陽堂の単行本でみるならば続々編以後は余分といってもよいほど蛇足のような感さえある。(名文か否かは別として) 続編から続々編へと移行してゆくあたりも、一度終ってしまった物語を、再び苦しまぎれに続けたような感じで、なんとなく不自然であり、当初の情熱も薄らいだようである。

貫一が最後の方で急に他人の心配などをしているのも不自然であり、たとえ自分の金で他人を何人か助けたところで、所詮は人を苦しめた金で人を助けるといふ、訳のわからない論理へと紅葉自身が首を突込んでいかねばならないことにもなっており、ますます不自然さが増してしまいます。紅葉自身は、もとよりそういう方向に物語を持ってゆく気持ちは(元来の熱血漢的性格から考えても)なかったものであろう。

ここに至って紅葉としても、どうにも収拾がつかなくなってしまい、迷路のような所へ入り込んでしまったのではないかと思われる。この大作が未完となってしまう裏面の理由の一つとみたい。

そのことはまた、当時はやり出した言文一致に背を向けたまま、新聞連載の大衆小説としてスタートした『金色夜叉』の宿命といえる結果でもあった。

結局『金色夜叉』は、古い文章意識で心血を注ぎ、題材を大衆小説的な所にまでひろげて、おどろくほど多くの、そして広範囲の愛読者を獲得することには成功したが、人間に対しても社会に対してもその把握が常識的すぎ、また文章表現に凝るあまり、文章即小説であるという意識があまりにも強く、どうしてもその域を脱しきれず、さらに通俗的な

おぜんだてと夥多な趣向のために行き詰まってしまい、何度か完結のチャンスがありながら遂にその完結のチャンスが逃がし、作者紅葉自身の手からさえ離れて波浮してしまった作品であるということが出来る。

しかし、紅葉文学の戯作性を否定的にのみ考えるべきではない。このことは土佐享氏も（『日本児童文学大系（四）昭和五十三年』）で指摘されている。

小説というものはまず、多く広く読まれなくてはならないという一面を当然持っており、文学とは文字による芸術であるという一面もまた真実であるからである。

西鶴、京傳、一九、そして源氏物語などの影響を多分に受けた紅葉の『金色夜叉』の古典的とも言える絢爛たる美文調の文章は、明治時代の文章の一つの象徴としての輝きを失うものではないことは確かである。